

華山筆瀧澤琴嶺像

菅 沼 貞 三

に資すために、「後の爲の記」中、本圖に關聯する一節を左に引用して置かう。

華山の筆作にかゝる肖像畫は、暈渲陰翳を施す洋畫的手法と潤達な墨描と輕淡な賦彩とによる、南畫的技法との融合和一の描法によつて、像主の奕々たる風貌をさながらに寫照し、彼獨特の清新な畫體を形成せる點に於て、近世繪畫史上特異な存在であると云ひ得る。就中、鷹見泉石像本誌第十
八號所收の如き、市川米庵像同上の如き、尤作を始めとして、士人の清鑑に堪え得る遺品が多數現存してゐる。而してそれ等遺品は殆んどすべて、既に世に紹介されてゐるが、文獻上に於て、あまりに周知であるに拘らず、畫史の上では未だ一度も顧みられなかつた作品が、最近所藏者の好意によつて、その調査をわが美術研究所に委ねられた。乃ち馬琴の一子、瀧澤琴嶺の肖像これである。

偕て本畫像製成の消息については、馬琴の「著作堂雜記」や同じく「後の爲の記」に詳しく、今更説くまでもないが、一に讀者の便

「予は先考の面影を記憶せり、太郎は今茲八歳なれば成長の後に至りて如何があるべき、いかでか孫どもの爲めに琴嶺が肖像を貽まほしく思ふ程に、五月六日になりぬ、昨今琴嶺が大病いよ／＼危殆也、とく渡邊華山氏（名は登、三宅侯の冢宰）に密談して、彼れが生前に肖像の事を頼まばやと思ひしかば、やがて手簡をものする程に、所親の來にければ、所要の義は告げずして、此手簡を明日の内に三宅殿の御内なる渡邊ぬしに届けよとあつらへて遣はせしに、其人七日にも事の紛れに得果さず、八日のあした使价を以て彼所へもたし遣はしけり、斯くて九日の申の時ばかりに、華山菓子一折もたらして來ていふやう、貴書を賜はりしに、免かれ難き主用にて參る事得ならず、今日とても同じ様にて、今朝より使者に出でたるが、篋轎をば外に留め置かして來つる也、偕令郎の御欠安はいかゞにおはするやと問はる、予答へて、さればとよ、孩兒は昨日の朝身まかりぬといへば、華山子いたく駭歎して、御亡骸はいかにと問はる、折柄溫暑に候へば、所親等に急がれてよんべ龕中に斂みたり、なれども今猶納戸にありと答ふれば、然らば暫し蓋を開かして拜見を許し給はんやといはる、素より望む所

なれば、折柄來て奥にありける養嗣清右衛門に由を示し、案内に立てゝかたの如くに物せしかば、華山子は筆硯を乞ふて枯相を寫す事半時ばかり、黄昏に出て來て予にいふやう、生前に候はねば宵るべくもあらね共、骨格は寫し得たり、畫稿成らば見せ奉るべしとて忙しく歸り去りにき、此舉定に千金也」

とある。

右の文中に於て、馬琴が華山に委嘱したは、琴嶺の面影をその子孫にのこさんがためとあるが、本畫像は現に馬琴の井戸として著名な、東京、九段下の舊蹟地に居住してゐる馬琴の後裔、瀧澤邦行氏の祕藏にかゝるものである。絹本著色、掛幅装、竪一〇七・五糎（三尺五寸五分）、横四五・一糎（一尺三寸六分）。表装は葛布で、一文字に唐草の金欄を用ひてゐる。恐らく作畫成就の當時そのまゝのものゝと推せられ、畫幅の保存また完好である。

二

畫面についてみるに、像主の風貌は一見病鶴がうづくまつてゐるやうである。瘦せ細つた手掌や、がつくりと肩を落した病軀の痛ましさは、宛かも鶴の如く清瘦にして、佻しい風姿をなしてゐる。而して一種の鬼氣、人に逼るものが存してゐる。一體華山の畫には、凄氣と云ふか、殺氣と云ふか、どこか險しい趣致が、その筆端に滲み出てゐるものであるが、斯幅はまたあまりにも凄愴の氣が充ちて、そゞろ心膽を寒かしむところがある。

斜右向の面を俯向き加減にして、顙頂の總髪や鬢髪には、淡墨を置いた上に、細筆にて一々毛筋を描き、額のやゝ禿上つて薄くなれるところも、見逃さず寫し出してゐる。顔面は淡俗赭に同色と淡墨とをもつて陰翳を施し、立體感を現はしてゐる。眉も細寫し、目と目の周圍の窪みに細線を用ひて、よくその形似を整へてゐる。而して目は上瞼と瞳に焦墨を入れ、瞳のまわりに胡粉を點じてゐる。鼻は細くて高く、頬骨も隆起し、頤も尖つてゐて、いかにも瘦頬で病弱の風がある。唇にわづかに淡胭脂と淡墨を施してゐる。面貌と云はず、すべて肉身は淡俗赭色を呈して居り、その肉線は柔輦な淡墨描をもて、形似を正確に現はしてゐる。

衣は薄紫黝色の地に、腰の部分を白抜にして、横縞を入れてゐる。帯は白群地の獻上博多である。而して紗の夏羽織には、大きい矢車の定紋が附いてゐる。かくて著衣の褶襞は、潤達な墨線を驅使し、その筆鋒は颯爽として鋭い。而もその線描と隈取とによつて、面の立體感を如實に表現してゐる點と、淡焦の墨を用ひて、夏羽織の透し工合を巧みに表現してゐる點など、實に堂に入つたものだ。大小の刀は、柄卷も下緒も群青を帶び、鮫皮の部分に胡粉を入れてゐる。右膝側に置かれた白扇の骨は淡俗赭色になる。

いま全幅を一望して、面貌や體容の立體的表現に於て、華山がいかに苦心して、當時舶載の西洋畫法を自家の藥籠中に收め得たかゝ窺はれると共に、著衣の輕淡の賦彩の裡に、縦横に引かれた墨描の鮮やかな點に於て、さすが南畫人の面目躍如たるものがある。

しかしながら、膝の部分が扁平に過ぎ、胴體に比して頭部が大に過ぎるので、安底感を缺いてゐることゝ、脇差が腹の真中邊に、差してある如く見えるので、尠からず奇異な感を抱かせる。本像のかかる瑕瑾は前記「後の爲の記」中に記してある如く、枯相によつて追寫した爲で、その十全を期すべきでなからう。

華山が枯相を寫したことは、嘗て文政七年九月その父巴洲逝去の時、自ら筆をとつて涙に咽びつゝ、その遺照を寫し置いたことがあ

華山筆 瀧澤琴嶺像 款印(原寸)

畫面の左側に「天保丙申癸亥朔七日友人渡邊登追眞」と記し、その側下に白文方形の「華山」印と朱文瓢形「登」印とが鈐されてゐる。即ち天保七年五月七日、恰も琴嶺の一回忌に當り、こゝに追眞像の成れるを示すもので、時に華山四十四歳に相當する。上記鷹見泉石像や市河米庵像の完成をみたのは、翌天保八年のことであり、彼の畫技の圓熟も既に本圖に於て窺はれる。たゞ惜むらくは本圖が純粹な寫生に成らざることである。

り、その草稿圖本誌第十
八號所收は現に華山の後裔渡邊元一氏の所藏かゝる。

また彼の愛弟如山の追憶像同が天保七年「客坐錄」中に圖されてゐる。ともに勿々の筆致になれるものとして、本畫像の如き完成圖には比すべくもないが、孰れも純粹の寫生に據らざる追眞像なること、また本像と軌を一にしてゐる。斯くして本像は華山の肖像畫中、決して上々の作とは言ひ難いが、その筆路正しく描法の苟めならざる點に於て、本畫者がいかばかり謹厚の態度を以て本圖に臨んだか、そゞろ俤ばれて推服に値する。

しかし翻つて思ふに、枯相によれる追眞像にして、かくばかり生采に富む肖像畫を醸成したは、華山を描いて何人か是れを成すことが出来たであらうか。

三

琴嶺の爲人に就ては、前記「後の爲の記」を始めとして、馬琴の「改過筆記」、同「戊子日記」にも見え、同じく著作堂雜記や馬琴日

記中に、散見するところである。今、馬琴の語るところを略記すれば、即ち琴嶺名は興繼、字は宗伯、寛政九年江戸に生れ、幼名を鎮太郎と云つた。稟性沈黙、群童と戯れず、夙に經書や書畫を學び、殊に畫法は八九歳の頃より金子金陵に就き、華山と同門になり、畫號を琴嶺と稱した。然るに性來の虛弱に加へて、弱冠の頃癩痘を病んで、終に習畫を廢するに至つた。

また一方に於て、彼は父命によつて醫を學び、二十三歳の時、松前侯の侍醫に召され、月俸數口を賜つて、近習格になつた。其後癩痘再發して、勞痘の怕れさへ生じたが、文政十一年彼三十歳の時、土岐村氏の路女を娶り、一男二女の父となつた。上記「後の爲の記」引用中の太郎は、即ち彼の嫡男である。而して後、彼は病の爲に醫業も人の需に應じ難くなつて、終に天保六年五月八日、享年三十八歳で歿した。彼の早世は性來虛弱の身に、過重な勉學を強いた馬琴の嚴しき薰陶に、その責の一半はあるとしても、馬琴にとつて琴嶺は、實に掌中の璧とも稱すべき存在であつた。さればその逆縁を哀しむ親の身によつて、華山の舉は「寔に千金」にまさる賚であつたらう。「後の爲の記」中、上記引用の後文に於て、馬琴は華山について、次の如く語つてゐる。

「抑華山子初め畫を金陵老人に學びしかば、琴嶺と同門にて、總角より相識られたり、其後一家の畫風を興して、古畫の鑑定に詳也、且人の爲に肖像を畫くに、をさ／＼蘭法により、鏡二面に照して其眞を攬るを以て、孰れも似ずといふ者なし、こゝを以て肖像を求むる人多しと聞ゆ、只畫の上のみならず、學術あり見識あり、其性も亦毅剛なるべし、曩にある人の席

上にて、主人の薦むるまに／＼觸體盃にて酒を飲みし事ありと聞く、かゝる本性にあらざりせば、よく枯相に手を觸れて其骨格を寫し得んや、寔に友は持つべきものぞと思ふ感心のあまりになん、此大略を書すのみ」とある。

華山が金陵に師事した頃のこととは、「渡邊家年譜」に見え、また彼の「退役願書稿」に見えて居り、殊に後者に於て華山は當時を回想して、次の如く述懐してゐる。

「芝之白芝山と申畫工へ入門仕候、此時十六歳之時也、然處貧人にて附届不行届とて、僅二年にて師家より斷を受申候、私も此時は如何可仕哉、泣しづみ候處親父申候は、金陵事は、御兩敬大森勇三郎様の御家來に付、其旨申たらば憐み可申申により、弟子と相成申候處、金陵殊之外相憐み、少しは出來候様に相成候得共、半紙を調へ候手段無之、初午燈籠之畫を作り、百枚にて壹貫之錢を取(中略)右を以紙筆を調へ申候」とある。

右により華山が金陵について習畫したのは、文化六年彼十七歳の時に當り、而して琴嶺が入門したのは、前記馬琴の記に八九歳頃とある。華山と琴嶺との年差は五年、その後文化十四年華山二十五歳の時に、金陵は歿して居る。琴嶺も弱冠に至らずして、既に習畫を廢してゐるので、兩者が金陵の門に出入して、共に畫道にいそしんだ時期は、數年を出でなかつた。而も琴嶺は年少で且病弱であり、螢雪の功を積む華山とは、自らその境涯も異つて居つたので、彼等交友間の親疏の程は窺知しがたい。しかしその交際は後年に至るも絶えることなく、且華山は琴嶺を通じて、馬琴の知遇を得てゐたや

うである。

馬琴日記、文政九年四月十九日の條に

「晝八半時過渡邊登來る。余對面。用談數刻。兎園別集下冊并に正徳金銀御定書一冊小ぶろしき共かし遣す。○二月廿四日柳新畫會の節○穢にて引籠居候間不參のよしにて銀一匁届くれ候様被申持參。宗伯他行中に付予うけ取おく、薄暮歸去」

とある。また同日記、天保二年三月廿一日の條に

「暮時三宅内渡邊登入來。則秉燭對面。雜談數刻。五時前歸去。但正月中同人妹不幸に付年始禮延引今日とし玉持參。去秋中同人より借用の四庫全書一帙今夕同人へ返之畢」

とある。

一方華山の「心の掟」文政六年華山三十一歳記中に、

「屋代臨池、靜廬北、馬琴瀧澤此三人は聞見を廣め書籍等借引致し益友なり」

と記してゐる。華山と馬琴との年差は、正に二十七年に及ぶが、上記の如く年始の禮や書籍の貸借などをみて、その交遊の程も窺はれるし、且また同じく藝文に遊ぶもの同志のことゝて、互にゆるすところがあつたらうと思はれる。

尙馬琴の日記や尺牘類より、華山に關する記事を摘記すれば、即ち日記天保八年七月十二日の條に

「予舊友三宅内渡邊登弟渡邊五郎此節流行の時疫にて昨十二日死去。今朝送葬のよし、國次郎尊にて初て聞。駭歎限なし」

とあり、また殿村篠齋宛の馬琴書簡三村清三郎氏編曲亭馬琴書簡所收に、華山が天保十

年己亥の厄に遭うた時のことを記してある中に、

「花山は夷狄の防ぎを第一にして、御國のおん爲に精力をつくすと云、予が云それすらぬ事也、人各その職分あり、陪臣は陪臣の職分あり、その君の爲に誠忠ならば事足るべし、その職にもあらぬ御國の大事を、己が位のごとくにこゝろ得たる悞にて、不測の罪を得たるなるべし」

と批判を下してゐる。また華山自刃の報を傳聞して、「著作堂雜記」中に次の如く記してゐる。

「華山は渡邊登なり、三宅肥後守用人なり、先年蘭學の事にて罪を得て、入牢久しかりしに、竟に三宅殿に御預けに成て、三州田原に送られて蟄居す、然るに猶其儘にてあらば、主君の爲あしかるべしと言ひ聞せし者あり、時に天保十二年十二月中旬（註、十月十一日のこと）華山意裏を書殘して自殺す、享年四十九歳ばかり成るべし、此故にや三宅殿いく程もなく御奏者番に成て勤めたまへり、華山の忠死其甲斐ありといふべし」

このことはまた馬琴日記、天保十三年正月二十三日の條に見えて居り、殊に「華山老母あり、妻あり、娘あり、何れも薄命の至り也、痛むべし」と同情をもつて記してゐる。

今茲に私は寓目の馬琴日記や一部の書簡類を通じ華山を語ること、頗に過ぎた嫌があるが、是等一部の記載に據つて、華山が琴嶺との交友を通じて、馬琴の知遇を得てゐた消息の一端を窺知することが出来たと思ふ。かくしてこの琴嶺像は、華山の肖像畫研究に一資料を加へ得たばかりでなく、當代の文人馬琴と畫人華山との交遊を語る記念として、近世藝文史上に一挿話を提供する好個の遺品とも云ふことが出来る。（昭和十三年九月）

畢山筆
瀧澤琴嶺像
部分

東京
瀧澤邦行氏藏